



## 産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

### 2023年もご支援、ありがとうございました！

産休サンキュープロジェクトでは、“新しいいのちの誕生”をきっかけに、アフリカで支援を必要とする人々に目を向ける「赤ちゃんの生まれてはじめての社会貢献」として、累計11カ国でアフリカの子どもたちやご家族の健やかな生活を支援してきました。

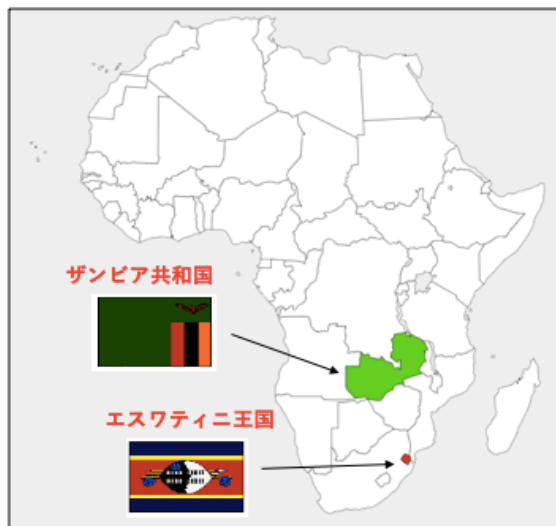
アフリカ、中でもサハラ砂漠以南（サブサハラ）地域では、気候変動に加えて、ウクライナ危機、新型コロナウイルス感染症拡大による食料や肥料価格の高騰から、かつてない規模の食料危機が続いています。緊急食料支援は短期的な災害時には不可欠ですが、アフリカで暮らす人びとが自らの力で困難に立ち向かう力（レジリエンス）を高めることが、長期的なアフリカの発展に有意義です。

2013年に開始した産休サンキュープロジェクトでは、2023年度、東アフリカと南部アフリカの計8カ国※を支援しています。今号は、昨年11月に現地モニタリングで訪れたエスワティニ王国とザンビア共和国での事業の様子をご報告します。

※ウガンダ、ブルンジ、ルワンダ、エスワティニ、ザンビア、ナミビア、マラウィ、タンザニア

### 南部アフリカ地域 地域保健・教育支援事業

エスワティニ王国とザンビア共和国はともに南部アフリカ地域にあります。世界の中で、もっともHIV感染症の蔓延している地域です。2022年末時点でエスワティニ王国では、15歳から49歳の人口の4人に1人がHIVに感染しています。ザンビア共和国での同罹患率は10.8%、依然としてHIV感染症・エイズは人びと、中でも社会的に脆弱な女性と子どもの健康の大きな脅威です。



### なぜ今も、HIV対策、支援が必要なの？

1980年代に初めて発見されて以来、死の病とも言われたエイズは、今では抗HIV薬の内服により発症を抑えることができ、一人当たりの年間治療費が1995年当時2万5千ドルだったのが、今では70ドルとなり、HIVに感染してもエイズの発症をくい止めることが出来るようになりました。

一方で世界にはこうした医療サービスにアクセスできない人たちが多くいます。国内、国際間の不平等がエイズ終結の障壁になっているのです。2020年以降の世界情勢の影響で、エイズを取り巻く環境は悪化しています。今、世界が結束してHIV対策に取り組むことで、将来の公衆衛生の危機に終止符を打つことができるのです。

## 子どもたちをつなぎ、権利と心を守る「ティーンクラブ」 エスワティニ王国赤十字社、シレレクリニックの取り組み

エスワティニ赤十字社が政府から委託を受けて運営する3つのクリニックのひとつ、シレレクリニックでは、エイズ孤児やHIV感染者など、社会的に弱い立場に置かれた人びとへの物的・心理的支援を行なっています。

エスワティニの首都ムババーネから車で約4時間走ったところに、シレレクリニックがあります。クリニックの「ティーンクラブ」には、毎月1回、18歳以下のエイズ孤児やHIV感染者が集まってきます。ここでは、クラブのメンバー同士がお互いの感染を知っているため、差別や偏見を心配せず、信頼して、ともに笑い、遊び、日頃通っている学校では話せない悩みを共有することができます。

メンバーの1人の男子学生は18歳。クラブの最年長として、年下のメンバーを思いやり、サポートしています。「19歳になるとクラブを『卒業』しなければいけないけれど、その後もクラブのメンバーを支えていきたい」と話してくれました。



© 日本赤十字社



© 日本赤十字社

「新型コロナウイルス感染症が拡大する前は、スポーツ大会や、他のクラブの仲間と交流プログラムを行なって、とても楽しかった。またみんなでサッカーをしたい。」（クラブ・メンバー）

「ティーンクラブに行ってきた日は、子どもの表情が違う。その日にあった楽しかった出来事を生き生きと話してくれる。ティーンクラブのお陰です。日本の支援に心から感謝します」（保護者の女性）

プロジェクトではまた、子どもたちと保護者を対象として、収入向上のための技術研修を行いました。研修はビーズ、刺繍、裁縫などの技術を指導し、小さなビジネスを始めて生計を立てられるよう支援しています。

## 自立へ向けて、取り残された人びとをつなぐということ

シレクリニックのボランティアたちは、定期的にHIV感染者の家庭訪問を行い、抗HIV薬による治療をきちっと守れているか、副作用はないかを確認し、何か困ったことがないかを聞き、心理的支援を行っています。

抗HIV薬治療を続けながら、近隣家庭の洗濯をして得た収入で一家を支えている4児のシングルマザーの女性は、事業から食料等の支援やカウンセリングを受け、何とか子どもたちを学校へ通わせています。プロジェクトの支援で、地元の首長へ繋いでもらい、住む家を見つけることができました。  
(写真右)



© 日本赤十字社

HIVと結核の二重感染で入院し、治療を受けた男性の家では、2016年から続く干ばつですべての作物がやられてしまいました。病気と干ばつで一度はあきらめた農作業ですが、プロジェクトの連携のもとに、他の生計支援プロジェクトからタネの供給を受けられるようになりました。(写真下)



© 日本赤十字社

## 子どもから子どもへ伝える「ピア・エドゥケーター」 ザンビア赤十字社カピリ・ムポシ支部の取り組み

カピリ・ムポシ市は、ザンビアの首都ルサカから車で約5時間のところに位置する人口4万人の地方都市です。ザンビア赤十字社カピリ・ムポシ支部は、ここで、エイズ孤児、HIV感染者などの貧困世帯を支援する取り組みを始めました。地方政府と協力して選んだ5つの学校で、貧困世帯の子どもへの学用品の支給や、学校のクラブ活動をとおしたHIV感染症・エイズ予防などの啓発活動を行なっています。支援を受けた子どものなかには、カピリ・ムポシ支部から研修を受けて「ピア・エドゥケーター」※として活動する子どももいます。

「わたしは、人のために何かすることが好きなので、研修を受けてピア・エドゥケーターになることができ、とてもうれしい。もっとクラブを活発にして、みんなのためになりたい」「高校を卒業したら、進学したい。だから、進学資金の支援を受けられるように、がんばって勉強している」と、ピア・エドゥケーターの研修を受けた女子学生は、目を輝かせて語ってくれました。

※ピア・エドゥケーターとは、同世代の仲間と一緒にエイズについて、また命の大切さを考える研修を受けた人のことをさします。カピリ・ムポシ支部では、エイズ孤児や学生のボランティアをピア・エドゥケーターとして研修しています。



© 日本赤十字社

## 未来へ繋ぐ、赤十字ボランティア

エスワティニとザンビアで出会ったエイズ孤児、HIV感染者の子どもたちは、困難な状況にありながら、お互い支え合って、精一杯生きています。自分が救われたように、仲間を助けてあげたい、支え合いたい、と語った子どもたち、その子どもたちを支えているのが、赤十字社のボランティアの力です。人手不足や資金不足を乗り越えるために、様々な垣根を超えて、政府や他の援助機関と協力して、どんな状況にあっても、活動を続けているボランティアが、社会的に弱い立場にある人びとを未来へ繋いでいます。



© 日本赤十字社

# あばばいえい通信 日赤ルワンダ現地代表部首席代表の吉田拓がお届けします!

## 見えない姿と出会い、聞こえない声が湧き上がる世界を作るために



© 日本赤十字社

わたしたちは、社会的に厳しい立場に置かれている人びとの見えない姿を認め、聞こえない声を聴き、寄り添い、力づけていくお仕事をしています。でも、このやり方には根本的な問題があります。そもそもこちらから見えない、聞こえない人は、探しても見つけられるかわかりません。なにしろ、いろいろな事情があって姿や声がわからなくなっている人びとです。わたしたち自身が、常に見えていない人がどこかにいる、と謙虚でいなければならないと同時に、厳しい環境に置かれている人の様子を学び続け、アンテナを張っておくことを心がけています。

同時に、社会的に弱い立場に置かれている人が声を発し、主張するお手伝いをするのも大事だ、と考えさせられる出来事がありました。ルワンダでは、小学校で「創造的芸術(creative arts)」という科目があります。これは、日本の美術と音楽を合わせた科目で、子どもたちが創造的に自己表現する力をつけることをねらっています。とはいえ、画材は学校中探してもありませんし、楽器は伝統的な太鼓が1個あるくらいです。

そんなところで、音楽の授業に同席させていただきました。

40人ばかりのクラスに一つの太鼓です。先生が子どもたちの前で民謡を歌いながら太鼓でリズムをとり、太鼓を叩きたければ挙手するように言い、生徒を指名します。子どもたちは我先に手を挙げ、指名された子は小躍りして前にいき、先生のやった通りに太鼓を叩きます。他の子どもたちは太鼓のリズムに合わせて手拍子を合わせます。ちょっと太鼓のリズムがずれたりしても一緒に手を叩きます。ひとりひとり、みんなの前で太鼓を叩くチャンスがあります。

通常、ルワンダの小学校では、先生が黒板にひたすら書き付け、子どもたちはじっとそれを聞きます。みんなの前で発表して、みんなの反応を受け取るという経験はほとんどありません。また多くの子どもが中学校、高校に通うのを途中で諦め、地元のつながりの強い出身地で生活を続けることを選びます。生活環境、医療、経済の機会など不満や理不尽なことがあっても、それを黙って受け入れ、我慢する人が多

いです。土地の人脈で支え合って生きていくからこそ、人間関係に波風を立てず、生活環境、医療、経済機会などの不満や理不尽があっても黙って受け入れる人が多いのです。異議を申し立て、周囲から孤立してしまうのは村で暮らす人びとにとってはとても怖いことだと思います。

小学校の音楽の授業では、誰が太鼓を演奏しても、周りの子どもは手拍子を打ってついてきますし、太鼓を演奏している間は誰でもリーダーになります。皆の前で演奏し、皆がそれを楽しんでついてきてくれる、その経験が子どもたちにとって

は大きな自信になるのではと思います。経済的な見返りはすぐに戻ってこないかもしれませんが、思いを表現する力を身につけること、それが孤立ではなく、人を繋げ合うと知っていることは得難い財産になると思います。

弱い立場に置かれている人々に寄り添うことは、わたしたちが彼女たち（彼ら）に近づいていくだけではなく、人びとが安心して声を上げられる、集まれるような力を身につけるお手伝いでもあると思います。そのためにできることは何か、常に学んでいきたいと思っています。

## 編集後記：

昨年末から久しぶりに一時帰国しています。日本の冬は僕の記憶以上に寒いような気がします。久しぶりに会う家族と友人たちの温かさに感謝しています。一方で、年明けに北陸地方を大きな地震が襲いました。地震と津波の被害とその後の天候の厳しさを見ると、胸が痛くなります。被災地の皆さんの安全と一日も早く復興することを願っています。（吉田拓、日赤ルワンダ現地代表部首席代表、キガリ在住）



第4期をご支援いただき心より感謝いたします。この1年産休サンキューをリニューアルするぞと「(仮)子どもプロジェクト」の立上げに奔走してきましたが、「産休サンキュー」というキャッチーなネーミングを超えるものがまだ見つかっていません。どんな形でお目にかかるかわかりませんが、引き続きアフリカとそこで生きる子どもたちを支援するプロジェクトを続けてまいりますので、次期もどうぞ温かいご支援をよろしくお願いたします。（八尋絵美、日赤本社国際部開発協力課）



産休サンキュープロジェクトを担当するようになって一年半、初めてプロジェクトの現場を訪れました。25年ぶりに訪れたザンビアの都市の豹変ぶりに驚愕すると同時に、地方へ行った時、変わらぬ村の様子や人びとの表情に、懐かしさを覚えたり、ほっとしたりもしました。子どもたちの輝くばかりの笑顔をしっかり心に留め、今年もアフリカにどっぷり浸かりたいと思います。（山岸信子、日赤本社国際部開発協力課）



- 日本赤十字社 国際部 開発協力課  
産休サンキュープロジェクト担当  
電話：03-3437-7089 E-mail: [sankyuthankyou@jrc.or.jp](mailto:sankyuthankyou@jrc.or.jp)

- [Yahoo!ネット募金](#)を通じたご寄付はこちらから [日赤 産休サンキュー Yahoo募金](#) [検索](#)

